

2024年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2025/9/28

団体名		カスミソウ 自由登校を見守る会		活動タイトル	不登校・行き渋りの親子の孤立防止のための居場所と環境作り			
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）					■活動風景			
●地域の望ましい社会状況(ビジョン)		私たちの団体が実現したいのは「どんな子どもも尊重される社会」である。 「不登校は誰にでもおこりうる」と文科省は指摘しているが、大多数が学校に行く現実の中で、不登校の当事者親子は自分を責めたり、知識がないゆえの悪気のない偏見を向けられたりすることがある。居場所も十分でないため、精神的にも物理的にも孤立しがちである。学校に行っていないも行っていないなくても、のびのびと学び遊び、人と交流することができる地域を作り、どの子も価値ある存在であることを共有できる社会を実現したい。			小学校での対話			
●団体の社会的役割(ミッション)		私たちのミッションは、不登校・行き渋りの親子の孤立を防ぐために、彼らが学んだり遊んだりできる居場所と地域を作ることである。下記の取り組みを柱とする。 1)保護者と子どもの孤立を防ぐために、つながりや居場所を作り、不満や不安を受け止め合う。（対話・共有・相談） 2)不登校や行き渋り、子どもの教育や福祉に関する情報を収集し、広く共有する。（学びあい） 3)どんな子どもも尊重される社会を実現するために地域に向けて発信し、対話を重ね、ともに課題に取り組んでいく。						
●団体の活動基盤		●人材の確保：相談への対応、居場所の安定的な運営のための運営スタッフ増員。スーパーバイザー、情報発信専門スタッフの確保。 ●リソースの確保：不登校・行き渋りの親子の居場所となる拠点。様々な団体との連携、社会資源の開発により、親子の居場所のネットワークが地域にあること。 ●活動資金：不登校・行き渋りの子どもがいる家庭は経済的負担が大きいため、入会金や会費は不要とし、イベントごとに大人100円の参加費のみとする（子どもは無料）。団体に蓄積された不登校の情報や経験談をまとめた冊子や子どもたちの作品の販売など自主事業を開発する。						
■活動報告			■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)			居場所 ポケモンGOの会		
●居場所の開催 定例の居場所を安定的に開催しながら、保護者や子どものニーズを把握できた際には、それに合わせた居場所を開催した。 ●事例集冊子・ホームページの作成 当団体メンバーの聞き取り調査を行い、体験談記事としてブログに紹介。さらに、体験談をコンパクトに編集し、居場所情報も加えた冊子を作成した。ホームページはドメインを取得し、制作に着手しているが公開は遅れている。 ●当事者と非当事者との対話 運営メンバーの子どもが通う学校に対話を呼びかけ、市原で2回開催。しかし、それ以外の学校では難しく、校内でのピア相談会の実施にシフトチェンジ。市原では開催でき、北区でも実施の可能性が出てきた。他方、地域の方といっしょに活動する機会を増やし、不登校児童生徒とあまり接点がなかった人たちに、関心を持ってもらうことができた。			●居場所の開催 ①61回の居場所を開催（うち小規模5回） ②目標アウトカム「当事者の孤立解消」：参加者の80%以上が他の参加者と交流できたと回答。 ●事例集冊子とHPの作成 ①冊子300部完成。HP公開し、引き続き更新していく。 ②目標アウトカム「当事者も非当事者も情報がえやすくなる。」：効果検証まで至らず。 ●当事者と非当事者の対話 ①学校内での対話2回実施。地域活動の会議に参加2回。校内ピア相談13回。 ②目標アウトカム「当事者と非当事者がともに対応を考える」：校内対話のアンケートでは参加者全員が「不登校に関して新たに気づいたことがあった」と回答。 ●活動基盤の強化 ①相談業務に関する研修2回・SNS担当スタッフ1名					
■事業を通じて得られたノウハウ			■望ましい社会状況を達成するための課題					
●ニーズにあわせた居場所の開催：子どものニーズに気づいた際に、必要な場所や人材を地域に確保し、その要素を盛り込んだ居場所を実施できるようにした。不登校のケースはそれぞれ違うため、活動を硬直化させずに、常に柔軟でいることが大事。 ●事例発信：冊子・HPの作成過程で、等団体が届けたい内容と相手を再確認できた。事例記事の全ビュー数が約5000になり、体験談へのニーズがあることを確認。 ●相談対応：小学校、フリースクールでの保護者のお話会を実施し、保護者が抱える困りごとを把握できた。そこで得た意見や情報を、個別の相談にも活かすことができた。 ●地域との連携：社協・学校・SSW・カウンセリングルーム・フリースクール・他の当事者団体・地域活動団体とのつながりが増え、相談を受けた際につなぐことができた。 ●学校との連携：学校の先生との対話に挑戦する中で、アプローチの方法、提案する内容などについて、学校が受け入れやすい形が少しずつわかってきた。			どんな子どもも尊重される社会というビジョン達成のために、当団体は不登校・行き渋りの親子の孤立防止をミッションとしており、活動の柱は大きく2つ。1つは、当事者親子の居場所作り、もう1つは非当事者ののに不登校の現状を知ってもらい、ともに対応を考えてもらうための働きかけである。非当事者への働きかけとして、今年度は、冊子やHPなどでの情報発信、対話の場を設けることに取り組んできた。居場所への参加は増加しており、不登校の相談先の一つとして意識してもらえるようになっている。 行政や民間企業・団体による不登校対策は進んでいるが、さまざまな理由で社会資源にたどり着けない人は多く、この両者をつなぐ役割が必要とされている。我々当事者団体の強みは、当事者のニーズを素早く理解できることと、自由に動けることであり、その力を使ってその役割を担っていきたいと考えている。			この1年間の活動を通じて	56回の居場所を実施し、子どもと大人、あわせて756名が参加。学校の先生との関係構築に着手。体験談をまとめた冊子を完成。	を達成しました。
							■受益者の具体的な変化（自由記入）	
						・緊張していた子どもが、何度か通ううちにリラックスして過ごせるようになった。 ・孤立の深かった保護者が、運営メンバーと長期間に関わり、少しずつ元気を取り戻した。 ・学校の先生が不登校に関するもやもやを打ち明けることができた。		